1967年「ダヤク示威行動」における インドネシア西カリマンタン州 ダヤク社会のポリティクス

キーワード

西カリマンタン、華人、ダヤク示威行動、赤い腕、ウファン・ウライ

松村智雄

はじめに

1990年代後半にインドネシア西カリマンタン州で発生した、先住のダヤク人及びムラユ人（マレー人）とマドゥーラ島からの移住民との間の凄惨な民族紛争は世界に衝撃を与えた。しかし、西カリマンタンの民族関係の歴史をさかのぼると、1950年代には際立った紛争は起こっておらず、内陸部の広い地域に居住した華人⁽¹⁾とダヤク人の関係はおおむね良好であった。それが劇的に変化する契機となったのが、本論文で述べる1967年「ダヤク示威行動」であった。この事件は、西カリマンタン華人の「集団的記憶」になっており、彼らの間では「紅頭事件」と呼ばれている⁽²⁾。この事件はインドネシア国軍に教唆されたダヤク人の一部によって、短期間のうちに約6万人の華人が内陸部の故地を追われ、西沿岸部のポンティアナック（Pontianak）やシンカワン（Singkawang）へ強制的に移住させられたものである〔Davidson and Kammen 2002〕⁽³⁾。この事件の起こった時期のインドネシアの政治状況を振り返ると、1965年9月30日事件以降、ジャワ島、バリ島の広い地域で、共産党関係者と目された人々の逮捕・大規模な殺害が起こっていた。この背景には、1950年代末より、共産党系、イスラム系、ナショナリスト系といった区別の明確な大衆組織が農村部においても並立・対抗していた状況があった〔倉沢 2014: 34-36〕。しかし、西カリマンタンには同様の対立構図は存在しなかった。このように、大規模な紛争が生じる背景が乏しく、ジャワやバリとは社会政治的状況が大きく異なる西カリマンタンにおいてなぜ「示威行動」が起こったのであろうか。

また、この事件は西カリマンタンの社会構造を大きく変化させた。元来華人が耕作

していた土地には、マドゥーラ人が移住し、彼らとダヤク人との関係ははやくも1970年代に悪化し、局所的紛争が生じている [Davidson and Kammen 2002: 80]。デイヴィッドソンとカンメンは、1967年「示威行動」において華人がダヤク人によって追放された地域と、1990年代後半に起きた民族紛争においてマドゥーラ人がダヤク人によって追放された地域が近似していることをもって、「示威行動」がその後の民族関係に大きな影響を与えたことを指摘している。しかし、これまでの研究状況を顧みるならば、この事件について、華人研究の視角から、あるいはインドネシア国軍研究の視角からの成果は存在するものの、それまでダヤク人と華人は共存していたにもかかわらず、なぜダヤク人が華人を追放するまでに緊迫した状況に至ったのかという問題を、ダヤク人社会内の多様なレベルにわたって追究した研究は管見の限り存在しない。本論文は、ダヤク人指導者層のポリティクス、また一般住民がどのように華人追放前後で反応したのかを分析することによってこの問いに答えようとするものである。なお、本論文中ではこの事件を表す呼称として、ダヤク人側の主体的行動に重きを置き「ダヤク示威行動」を用いる。実際にダヤク人はこの事件をインドネシア語で *Demonstrasi Dayak* (*Dayak Demonstration*) と呼んでいることから適切な用語と考える。

またこの事件は、単に西カリマンタンという一地域で起こった出来事としてだけでは捉えられない広がりを持つ。それは「示威行動」がインドネシア国政、及び国際政治、とりわけマレーシア連邦形成に反対するスカルノ政権の政策、9月30日事件以降のインドネシアの左派の殲滅と右派の政権掌握の動きと連動して起こったからである。

西カリマンタンでは、1960年代初めからマレーシア連邦結成に反対し、1963年の連邦結成後もそれに反対し続けた英領サラワクの共産主義ゲリラ組織が越境して活動していた⁽⁴⁾。また同時期、ソフィアン (Said Achmad Sofyan) を長とするインドネシア共産党西カリマンタン支部は特に華人住民の組織化を行っていた [Davidson and Kammen 2002: 59] ⁽⁵⁾。彼らは同じくマレーシア連邦結成に反対であったスカルノ政権の支持も受けており、ジャワからも義勇軍が参加していた [Davidson 2008: 55]。1962年に起きたマレーシア連邦結成反対派のアザハリ (Sheik A. M. Azahari) によるブルネイ反乱後、彼らの勢力とサラワク華人主体の反マレーシア勢力のゲリラは協力関係に入った。さらにはマレーシアと「対決 (Konfrontasi)」姿勢を採るインドネシア政府の後援で、華人主体の共産主義ゲリラが組織化されて1964年にサラワク人民遊撃隊 (*Pasukan Gerilya Rakyat Sarawak*, PGRS, 中国語名は砂拉越人民遊撃隊)、1965年に北カリマンタン人民軍 (*Pasukan Rakyat Kalimantan Utara*, PARAKU, 中国語名は北加人民軍) が結成される。これらの組織はカリマンタン島のマレーシア、インドネシア国境地帯で活動するようになった [Mackie 1976: 126-128; Coppel 1983:

145-149; Davidson and Kammen 2002: 55-58; 原 2009: 163-171]。

このような状況が9月30日事件以降、180度転換する。スハルトはいちはやくマレーシアとの国交を回復し、それまでインドネシア政府の公的な支援を受けていたゲリラ組織の掃討作戦を展開する。一方、インドネシア共産党西カリマンタン支部は9月30日事件以降、サラワクゲリラの後方支援を期待して武力闘争を開始し、1967年7月、サラワクゲリラと提携してサンガウレド (Sanggau Ledo) のインドネシア国軍基地を襲撃した [Davidson 2008: 64]。この事件後、ゲリラ根絶の必要を痛感したインドネシア国軍は、当時の言い方を用いれば「魚 (ゲリラ組織) を駆逐するのに、池の水 (内陸部の華人社会) を抜く」という方策を採った [Feith 1968: 134]。これはジャワやバリにおいて行われた共産党粛清 (1965-66年) とスハルト新体制の基礎確立の最終局面 (総仕上げ) といった意味を国軍にとって持つものであり、その後同種の事件は生じていない [倉沢 2014: 187-200]。またインドネシア共産党西カリマンタン支部もこの事件を契機に急速に勢力を失って孤立し、1974年に完全に崩壊する [Davidson 2008: 82]。

本論文は、以上のような政治動向の只中で生じることになった「示威行動」の背景には何があり、どのようにこの事件が引き起こされ展開し、それによって何がもたらされたのかを、ダヤク人指導者層のイニシアチブとそれに呼応した一般のダヤク人の行動に即して理解することを目的にしている。

I 西カリマンタンの社会構成の概要

西カリマンタンにはムラユ人 (マレー人)、ダヤク人、華人の区別が存在する。この民族区分は以下に示すような歴史的過程を経て形成されてきた。最も古くから西カリマンタンに居住した人々は、沿岸部から内陸部までの広い地域で生活していたが、彼らは、スマトラ島やマレー半島からの移民やアラブ系などのイスラム教徒の渡来により、沿岸部ではイスラム化した。彼らが緩やかなムラユ人意識を形成する。また、イスラム化されなかった人々は内陸部に主に居住した [Somers Heidhues 2003: 27-28]。彼らが現在ではダヤク人と総称される人々であるが、この「ダヤク人」という呼称は元来オランダ人が内陸部に住む非ムスリムを指して用いた言葉であった [Bamba 2008]。彼らの間には汎ダヤク意識はなく、各地域の言語、文化を同じくする集団としてカナヤン人 (Kanayatn)、マニユケ人 (Manyukeh)、イバン人 (Iban) といった民族区分が存在した。しかし、オランダ植民地期末期より、カトリック教会の提供する教育を受けた人々の間で、ムラユ人に対して劣位にある人々全体の地位改

善要求が叫ばれ始め、汎ダヤク意識が普及した。一方ムラユ人は、西沿岸部のポンティアナックやムンパワ（Mempawah）、サンバス（Sambas）のスルタンの権威のもとに王国を形成した〔Somers Heidhues 2003: 27-28〕。

さらに、18世紀中葉より中国華南地域からの移民が流入した。彼らの多くは広東省出身の客家系移民であり、スルタンたちの許可を得て金鉱の開発に携わった⁽⁶⁾。その初期には、羅芳伯（Lo Fong Pak, 1738-1795）という人物に率いられた客家人の集団が金鉱運営に関わり、自治的組織を作った。彼が主導して結成したのが「蘭芳公司（Lanfong Kongsí）」という政体であり、ほかにも競合する「公司」が複数存在した。これらの政体は18世紀末から19世紀中葉まで、植民地政庁も制御下に置くことができなかったほどの政治的、軍事的権力を持っていた〔Yuan 2000〕。また、ポンティアナックには客家系移民とは系統の異なる潮州系移民⁽⁷⁾が定住し、商業に携わった⁽⁸⁾。ただ、各会社の構成員や商業従事者が、特定の言語集団に限定されるわけではなかった。また、先述したとおり、ダヤク人と華人の間には1950年代まで目立った紛争はなく、彼らは共存していた。

II 先行研究

「示威行動」に関連する先行研究には、大きく分けて（A）共産主義ゲリラの活動に関係する著作、（B）華人史、（C）西カリマンタン民族関係史がある。（A）はサラワクの華人主体のゲリラ組織の活動に関する研究である〔原 2009; Porrit 2004〕。ただ、これらの研究の関心はゲリラの活動にあるため、それが原因で起こった「示威行動」に関しては簡単な記載はあるが、主な探究のテーマにはなっていない。（B）に当てはまるのは Coppel [1983], Feith [1968], Mackie [1976], 戴・井草 [1974] などのインドネシア全般の華人史のほか、西カリマンタンの華人に特に注目したソマーズ・ハイトヒューズ〔Somers Heidhues 2003〕、許耀峰（Hui Yew-Foong）の著書〔Hui 2011〕がある。これらの中でも当該事件について触れられるが、ソマーズ・ハイトヒューズの記述は二次資料に拠ったものであり、許耀峰は、華人に対するインタビューをもとに書いているが、ダヤク社会のポリティクスについてはそれまでの研究を踏襲するものである。

（C）にあてはまるもので、本論文の直接の参考になるのはデイヴィッドソンとカンメンによる論文、及びデイヴィッドソンの単著である〔Davidson and Kammen 2002; Davidson 2008〕。この2つの研究成果はダヤク人社会内部のポリティクスに迫ったものであるが、主にインドネシア国軍の内部資料を用いており、国軍の行動に関しては

極めて詳細な情報を提供するものである。しかし、これはあくまで国軍の把握した「示威行動」の一側面を分析したものであり、ダヤク人に直接アプローチして得られた情報は少ない。また、西カリマンタンのダヤク人政治史を主題としたタナサルディ (Taufiq Tanasaldy) の著書は、「示威行動」へのダヤク人の主体的参加について、当時のダヤク人政治家の蔵書などの新たな一次資料を発掘して考察したものである [Tanasaldy 2012]。しかしながら、エリート層の政治について詳述されている一方で一般住民がどのようにこれに呼応したかについては明らかにされていない。筆者はこれらの先行研究が抱える問題を克服するため、自身が行ったダヤク人の各地の名士、一般住民、華人、軍関係者へのインタビュー及び文字資料を統合して、当時の様子を再構成することを試みる。

III ダヤク人の政治社会状況

1 ダヤク人エリートのポリティクス

本節ではダヤク人エリートの政治活動の展開について俯瞰する。

オランダ植民地期においては、オランダ政庁は、ダヤク人がムラユ人に搾取されているとして積極的に彼らを庇護した。また、オランダのカトリック勢力は西カリマンタンの内陸部まで布教活動を行い、学校を設立した [Davidson 2008: 34-36]。そこで教育を受けた人々が汎ダヤク運動を担っていく。ダヤク人のムラユ人や華人に対する後進性を克服し、ダヤク人の地位を高めていくという彼らの運動が汎ダヤク主義の源流となった。

日本は1942-45年に、軍政を敷いたが、1944年、親オランダのムラユ人王族と各地の華人の有力者を、日本の統治に逆らうものとして逮捕し大量に殺害した [Somers Heidhues 2005: 106-129]。この時、ダヤク人は地域社会の権益とは直接関係がなかったためにほとんど被害を受けなかった。この事件により、ムラユ人、華人の有力者が失われたことで、ダヤク人の地位は相対的に高まった。

この時期の汎ダヤク運動を率いた人物にウファン・ウライ (J. C. Oevaang Oeray) とパラウンスカ (F. C. Palaoensoeka) がいる。どちらもカトリック神学校を卒業した教師である。パラウンスカがまず Daya In Action (DIA) ⁽⁹⁾ という政治組織を作り、その後ウライがこれを発展させて1945年に「ダヤク統一党 (Partai Persatuan Dayak, PD)」を結成する [Davidson 2008: 37-38]。この政党は、西カリマンタンの地方政党として根強い人気を示したが、1959年に発布された大統領令7号により地方政党が禁じられたことによって解散となった。その後ウライは左派のインドネシア党 (Partindo:

Partai Indonesia) で、パラウンスカはカトリック党 (Partai Katolik) で活動した。1950年代末より、2つの異なる政党を率いるウライとパラウンスカの間の競争意識は強まり、ダヤク人社会への影響力において競い合った [Tanasaldy 2012: 112-114]。ウライは非カトリック教徒をも取り込み、大衆動員的なスカルノを支持していた。一方、パラウンスカはカトリック色を前面に出し、反共を掲げた [Davidson 2008: 44-46]。ウライは、1960年にダヤク人として初めて西カリマンタン州知事に就任する。しかし9月30日事件の影響を受け、ウライが率いる左派のインドネシア党は強制的に解散させられ、彼は1966年に知事職から退く。一方、彼と競合関係にあったパラウンスカはスハルト体制期においてもカトリック党で活動した [Davidson 2008: 106]。周縁化されたウライは、何とかして西カリマンタンにおいて政治家として返り咲くことを考えていた。そのような時に国軍による「共産主義者追放計画」が登場したのである。これについては第 V 章で詳述する。

2 1950年代の内陸部ダヤク村落の概況

ここまでダヤク人上層部の競合関係について述べたが、本節では内陸部における華人、ダヤク人双方の非リーダー層の経済社会関係について述べる。これについては文字史料に依ることができないので、当時の生活に関するインタビュー調査を基に記述する。インフォーマントの選定については、多様な地域の状況について把握できるようにできる限り配慮した。彼らの証言には共通する要素が多く存在しており、その部分を軸に相当程度、内陸部の生活について再現することが可能であろうと思われる。

トーホー (Toho) に居住し、ゴム農園を経営していた曾松輝 (1930年生まれ) によると、1950年代当時、華人とダヤク人の関係は良好であり、共に食事をしたり農作業をしたりすることも多かったが、居住地域は分かれており、華人とダヤク人が結婚することも稀であったという。ゴムの樹液採集には、ダヤク人を働き手として雇用していた⁽¹⁰⁾。また黄国謀 (1941年生まれ) によると、以前居住していたムンジャリン近郊のカンプン・バウエン (Kampung Bawen) では、ダヤク人との関係は良好であり、共に仕事をする事も稀ではなかったが、住むところは別であり結婚も少なかったという。彼は当時ゴム園を持っており、ダヤク人を雇用していた⁽¹¹⁾。アプイ (A Pui, 60歳代の男性) は華人を自称するが、親族の中にダヤク人がいる。彼は、故郷クアラベヘ (Kuala Behe) での生活においてもダヤク人と華人の共同作業は日常的であったが、居住地域は分かれていたと筆者に語った⁽¹²⁾。ポンティアナックにある国立大学、タンジュンブラ大学 (Universitas Tanjungpura) で教鞭をとる S 教授 (1957年生まれのダヤク人) は、出身地のパフマン (Pahauman) においては総じてダヤク人と華人の関係は良好であったが、住居の分離、華人とダヤク人の間に雇用・被雇用関係

があったということ、また華人の生活様式に対し日常感じる羨望、経済的格差、反感があったことを明確に述べた。例として、華人は料理に油を使用したけどダヤク人は野菜を茹でることしかできなかったこと、ダヤク人は農産物を華人に売り日用品を華人から買ったが、日用品を買うとき華人の言い値で買わざるを得なかったことをS教授は語った⁽¹³⁾。

スバドゥ (Subadau) に住むダヤク人、オルバヌス・オクー (Orbanus Oku, 1943年生まれ) は、華人の経営する食堂では、当時まだ珍しい化学調味料により料理が美味であったが、家でダヤク人が同じように料理をしてもその味が出ず、その調理法を華人が秘密にして隠しているということが不愉快であったと語った⁽¹⁴⁾。

これらの証言から、総じて華人とダヤク人の関係は良好であるものの住居は分離され、雇用・被雇用関係があったこと、華人の生活様式に対する日常感じる羨望、反感があったことが読み取れる。しかし「共産主義者に対する敵意」や同時期のジャワで登場していたようなイデオロギーによる社会分化は聞かれなかった。

IV 「示威行動」に至る経緯

前章で述べたような政治社会背景の上に、「示威行動」はどのように発生したのであろうか。デイヴィッドソンとカンメンによると、インドネシア国軍は1966年10月から12月までゲリラ掃討のための第1作戦、1967年1月から3月まで第2作戦を展開している [Davidson and Kammen 2002: 58-60]。また1967年初めには、サラワク国境近くを華人居住禁止区域に定めている [Tanasaldy 2012: 142]。

7月の国軍基地襲撃事件の後、地元紙及び全国紙は、西カリマンタンの華人は共産主義者であるとしきりに報道するようになり、ダヤク人の間でも、華人の80%は共産主義ゲリラと関係があるという噂が流布するようになる [Tanasaldy 2012: 143]。また軍人は内陸部に赴き「華人は共産主義者であるから彼らの言うことを信じないように」と触れ回っている [Tanasaldy 2012: 143]。8月にはインドネシア国軍は、陸軍降下部隊 (Resimen Para Komando Angkatan Darat, RPKAD) を西カリマンタンの国境地域に導入している [Davidson and Kammen 2002: 62-63]。この陸軍降下部隊は、ジャワやバリの共産党掃討作戦においても暗躍しており、大規模な殺人に関係している [倉沢 2014: 107-150]。これが西カリマンタンに導入されて、情勢はより緊迫したものになった。

西カリマンタンを管轄するタンジュンプラ第12師団の従軍神父として「示威行動」の現場に接し、回顧録『従軍神父としての職務遂行の回想 (Memori Pelaksanaan

Tugas sebagai Pastor Militer)』[Doera 2003]を執筆しているイサク・ドゥーラ神父は、筆者とのインタビューにおいて、「示威行動」前夜に軍人がダヤク人首長を郊外に連れ出し彼らを殺害して、これを華人の共産主義ゲリラの仕業に仕立てあげる自作自演を行ったと明かしている⁽¹⁵⁾。また、インドネシア国軍の機関紙『アンカタン・ブルスンジャタ (*Angkatan Bersenjata*)』には、「1967年9月3日、軍は9人のタウム (Taum) のダヤク首長が、中国人共産主義者ギャングに殺害されているのを発見した」と述べたという内容の記事が見受けられる⁽¹⁶⁾。しかし国軍による挑発行為にもかかわらず、反華人の動きは生じなかった。これは、同時期のジャワのようなイデオロギー対立が西カリマンタンに存在しなかったためであろう。「示威行動」の直接の契機となったのは、以下に述べるダヤク人上層部が画策した「赤い腕」の伝達と、それに呼応した一部のダヤク人の行動であった。

タナサルディの調査結果で興味深いのは、国軍による挑発はあったものの、軍人自身もこれから何が起こるのか分かっていなかったという点である [Tanasaldy 2012: 145]。「示威行動」の初期においては、軍の画策よりもダヤク人、特にウライのイニシアチブが濃厚に見られるのである。次にこれについて検討する。

V ウライと「赤い腕」

「示威行動」の契機として注目されるのは、ウライの役回りと「赤い腕 (mangkok merah)」と呼ばれるダヤク人の間での戦争開始の合図である。「赤い腕」と「示威行動」の関係については先行研究においても指摘されている [Davidson 2008; Somers Heidhues 2003]。腕の内容物によって伝達される情報が異なり、中身がウコンと米の場合、伝達内容は「和解、平和、停戦」、一方中身がジュラナン (jeranang) という赤い染料、茅、先を尖らせた竹の場合、戦争開始を意味する⁽¹⁷⁾。

「示威行動」へのダヤク人の参加について、ドゥーラ神父は「カトリックに改宗したダヤク人は「赤い腕」を回すことを拒否したが、キリスト教が広まっていなかったダリット (Darit) のマニユケ人 (Manyukeh) と呼ばれる人々が「赤い腕」を回して華人追放に直接関与した」と証言している⁽¹⁸⁾。また、当時西カリマンタン内部でカトリックの宣教に携わっていたオランダ人神父ファン・フルテン (Herman Josef van Hulten) は、「華人から本来ダヤク人の土地であるアンジュンガン (Anjungan) 一帯を取り戻すということを主張していたウライは、大蜂起の前、ダヤク人のカトリック党 (Partai Katolik) 関係者に協力を求めに来た。しかしこの案は受け入れられず、次にウライはカトリック化されていないダリット地方の首長たちに会った」と書いて

いる [Hulten 1992: 280-281]。

いずれも、カトリックを受け入れたダヤク人はウライが画策した「赤い腕」の伝達を拒否し、まだキリスト教の影響が少ないダリット付近のダヤク人が「赤い腕」に呼応したとしている。ただ、どちらもカトリック関係者の証言であることを考慮すると、カトリック信者を擁護する意図があった可能性がある。しかしながら、ウライの働きかけに積極的に呼応したのは、ダリットを主な故地とするマニユケ人というダヤク人のサブグループであったことは確からしい。また「カトリック党による拒否」の背景には、ウライとパラウンスカ率いるカトリック党関係者との確執も想定できよう。「示威行動」の初期においてその主力はマニユケ人であった。しかし、11月から更に過激化する「示威行動」では、マニユケ人以外にも関与した。

ウライ自身の「示威行動」の動機について、後年ウライ自身、「私こそが、ダヤク人の権益が優先的に守られる地域を作ることを提案したその本人である」と言明している [Jenkins 1978]。これに加えてタナサルディによれば、ウライは、華人のほとんどが共産主義者と何らかの関連を持っているという信念を持っており、これがウライの華人に対する戦争を発動させる直接的な動機になっていたという [Tanasaldy 2012: 149]。筆者が行った聞き取り調査等から分かったのは、ウライが明確な意図を持って、ダヤク社会における自らの権威を生かして「赤い腕」の伝達の指揮を執ったこと、これに主に呼応したのはマニユケ人であったことである。

VI 「示威行動」の拡大

一般のダヤク人はどのようにして「示威行動」への主体的参加を決定したのであるうか。「示威行動」は最初10月14日にブンカヤン (Bengkayang) 郊外で発生し、サマランタン (Samalantan)、シンカワン一帯まで拡大した後、11月初めにはより南のスナキン (Senakin)、パフマン、アンジュンガン、ダリット、ソソック (Sosok)、ンガバン (Ngabang) に飛び火したとされている [Davidson 2008: 222]。

まず、初期の「示威行動」としてサマランタン (Samalantan) の事例を挙げる。この地域の住民によると、1967年以前には町の表通りには多くの華人が商店を構えており、活況を呈していたということである⁽¹⁹⁾。またダリット生まれのマニユケ人で、筆者が調査を行った2010年当時サマランタンのダヤク首長を務めていたトマス・ムラド (Thomas Murad, 1940年生まれ) は、「事件以前にはダヤク人は華人と近い関係にあり、軍からもそう思われていたが、自分たちは決して華人側には付かないこと、ダヤク人全体の利益のために、そしてインドネシア国家のために立ち上がったウライ

の考えに共鳴した」と述べた⁽²⁰⁾。

10月末から11月初めに大規模な「示威行動」が起きたのは、ウライが華人を追放し、ダヤク人の優位が保証される土地にすることを計画していたアンジュンガンー一帯であった。この時期に「示威行動」が拡大した原因としてタナサルディは、軍人の補助のもとウライを中心として結成されたダヤク人の自警団「パンスマ軍 (Laskar Pangsuma)」の一定の役割を挙げている⁽²¹⁾。彼の著書によれば、10月末にウライは、ポンティアナックでダヤク人首長を招いて会議を開き、10月31日に戦争開始宣言を発し、11月3日に「パンスマ軍」を結成した [Tanasaldy 2012: 148-150]。ポンティアナックの会議にはサンバス県 (当時のサンバス県は、ブンカヤン付近の内陸を含む) のダヤク人首長が参加していた。この時点からマニユケ人以外のダヤク人も積極的に「示威行動」に参加し始めた。ドゥーラ神父もインタビューの中で、「軍人もウライに、ダヤク人の名において立ち上がってほしいと期待していた。ウライはダヤク人の利益のために華人を追放することに協力的であった。ウライは、ポンティアナックで1967年10月に各地のダヤク人首長を集めて会議を催した。この会合において、ウライはダヤク人首長に対して「共産主義者に徹底的に抵抗しよう」と呼び掛けた」と述べている⁽²²⁾。この戦争開始宣言に呼応するダヤク首長も多かったようであるが、一方で、たとえばサンガウでは、当地の首長がウライの戦争宣言に反対した例もある [Tanasaldy 2012: 149]。

10月中旬から、ウライが「赤い腕」の伝達を画策し、マニユケ人によってそれが実行されていることを鑑みると、散発的に起こった示威行動をさらに拡大させる目的で「パンスマ軍」が結成されたと推測される。「パンスマ軍」結成以前においてもウライの濃厚な「示威行動」への関与があり、引き続き「パンスマ軍」においても彼は主導的役割を果たしたのである。10月中旬から「示威行動」に参加していたダヤク人もまた「パンスマ軍」に合流した [Tanasaldy 2012: 151]。

「パンスマ軍」結成後に起きた「示威行動」について、ドゥーラ神父は、1967年11月12日、パフマンを通過した際、華人家屋がダヤク人によって焼かれているのを目撃している⁽²³⁾。また林世芳⁽²⁴⁾の著書によると、スナキンにおいて、赤い鉢巻をつけたダヤク人の一団が華人家屋に放火し、居住していた華人を追いつめた。追放された600人ほどの華人は、数十の道路工事用のトラックで、軍人によって護送された [林 2010: 24-25]。現在スバドゥで食堂を営んでいる70歳代のダヤク人女性、マルガレータ (Margareta) は、事件当時スナキンに居住しており、「示威行動」前夜の状況を語った⁽²⁵⁾。彼女は次の3点に触れた。中国人の共産主義ゲリラが活動を活発化させており、ダヤク人も身を守る必要が出てきたこと⁽²⁶⁾、食糧不足で困窮したダヤク人住民が華人の商店から商品を略奪することがあったこと、ダヤク人が共産主義者の中

国人に対して立ち上がる必要について口伝えに情報が広まったこと、である。「赤い腕が伝達され始めると誰も逆らえない、行動に出なければならない」とも彼女は語った。また、彼女はダリット方面から赤い鉢巻をした人々が来て、華人を追放しているのを見たという⁽²⁷⁾。この証言に登場するダヤク人が身に着けていた赤い鉢巻が、華人の間での当該事件の呼称「紅頭事件」の由来となっている。

現在バフマンに居住するF.D. (1946年ムンジャリン生まれのダヤク人) は直接「示威行動」に参加した⁽²⁸⁾。彼は当時、華人の共産主義ゲリラがダリット近くのムラブカトン山 (Gunung Merabukatn) に本拠地を定めていたということを聞いていた⁽²⁹⁾。「示威行動」の主体はダリットのマニユケ地域の人であり、ここからこの活動は拡大したと彼は述べた。一度「赤い腕」が伝達されると、村落の首長は、儀式を執り行い、村落のダヤク人はそろって、タリウ (tariu) という独特の波長を持つ鬨の声を発した⁽³⁰⁾。そこでチャレッ (calek) という鳥の血を顔に付ける儀式をし、各々ナイフや斧などの武器を持って出発した。周囲にはタリウがこだましており、それにあわせて声を発するうちに、自身の中に祖先の魂が入ってくるのを感じた。足はまるで地面に触れていないようで、飛んでいるように歩いた⁽³¹⁾。出発した時には20人ほどであったが、途中さまざまな村からの赤い鉢巻をつけた若者と合流した⁽³²⁾。彼自身もタリウを叫び、ますます緊張感は高まっていった。夕方に出発し、ムラブカトン山の方角に移動しながら複数の村落で華人の住居を破壊し放火した⁽³³⁾。抵抗が無ければ彼らが逃げるに任せたが、抵抗した者は殺害した。それから2日後、平常の状態に戻り、自身の家に帰ったのだという⁽³⁴⁾。

このように、最初、ウライの指揮のもとにダリット地域のマニユケ人を中心に発動した「示威行動」であるが、10月末のウライの戦争開始宣言の後、「パンスマ軍」が結成されるに至り、その範囲は拡大し過激化した。

VII 「示威行動」の結果

「示威行動」は11月中旬にはおおかた終焉を迎えた。この事件は西カリマンタン社会に何をもたらしたのか。デイヴィッドソンは内陸部で商業流通に携わっていた華人が追放されたことによって、物資運搬が滞り経済が衰退したことを強調する[Davidson and Kammen 2002: 71-72]。またドゥーラ神父はこの影響について自分が直接聞いた話を元にこのように分析している。

1969年、ポンティアナック出身のあるダヤク人商人が内陸部のアンジュンガン

で雑貨店を開いた。アンジュンガンは交通の要所であったことから以前は華人の商店が栄えていたが1967年以降、華人は皆無になった。アンジュンガンのダヤク人は、貨幣を持っていなかったためにツケが多くなった。あまりかねた彼がツケを払うようにある顧客に言ったところ、周囲のダヤク人は彼に反感を持ち、たちまちこの店は不人気となり、大量のツケを残したまま倒産した⁽³⁵⁾。

ここから分かるのは、事件後の内陸部の経済崩壊状況である。特にアンジュンガンで華人が徹底的に追放されたことは、ソマーズ・ハイトヒュースの著書でも特に強調されているところであるが [Somers Heidhues 2003: 251]、筆者が聞き取りを行ったアプイもこの記述を裏書きするような証言をしている⁽³⁶⁾。「ンガバンでは1970年代に郡長 (camat) が華人を呼び戻したが、アンジュンガンでは、ダヤク人が華人を寄せ付けなかった。その結果、ンガバンは今でも活況を呈しているが、アンジュンガンはダヤク人だけになり衰退した⁽³⁷⁾」。またドゥーラ神父は、「華人が耕作していた水田、ゴム農園は放置され、内陸諸都市を結ぶ長距離バス運転手も大半が華人であったため、移動手段が無い状態に陥った」と述べている⁽³⁸⁾。華人を追放し、ダヤク人優勢の地域を創設するという計画とあらはらに、物流を担っていた華人がいなくなったあと、内陸部の衰退は避けられなかったといえよう。

「示威行動」において重要な役割を担ったウライは、スハルト体制下においては、政府と党ゴルカルの国民議会議員として活躍する。選挙活動においても彼は、ゴルカルが西カリマンタン内陸部の社会福祉の発展に寄与することは間違いないのだからゴルカルに投票するように呼び掛けている⁽³⁹⁾。国軍に協力してダヤク人の権益を守ろうとした彼であったが、その目的は果たされないどころか、華人追放は内陸部の経済衰退を招いた。さらに、ダヤク人の政治面での周縁化が決定的となり、代わってムラユ人、ジャワ人の軍人を中心とする政治が西カリマンタン州で展開される [Davidson and Kammen 2002: 75-78]。西カリマンタン州におけるゴルカルによる翼賛政治の条件はこの事件によって整えられたのである。そしてその翼賛政治の中に、ウライは取り込まれていくのである。

おわりに

本論文によって明らかにされたのは、ダヤク人の主体的な「示威行動」への関与である。その根底には村落の生活の中でダヤク人が華人に感じていた不公平感や不満があった。

しかしこれは、「示威行動」の決定的動機とはならなかった。西カリマンタン内陸の社会においては、ジャワのようなイデオロギー対立は存在しておらず、村落部で緊張が高まっている状況はなかった。当初の国軍によるダヤク人の華人に対する敵意を煽る作戦も思うような成果を上げていなかった。しかし、ウライのイニシアチブによる「赤い腕」の伝達により、ダヤク人の一部であるマニユケ人による「示威行動」が開始され、さらには「パンスマ軍」の結成によって「示威行動」は拡大、激化していく。そこには国軍の援助はもちろんあったが、筆者の調査結果により浮き彫りになったのは、それ以上にウライを中心とするダヤク人エリートの主体的な「示威行動」への参加があったことである。この点は、国軍側の資料に拠る主要先行研究においても明らかにされていない点であった。

さらに「示威行動」について重要なのは、これが一回性のものではなく、同様の追放行動が、その後西カリマンタン内陸部に流入したマドゥーラ人に対しても発動された点である。ダヤク・マドゥーラ紛争のメカニズムを長期的視点で理解するためにも、1967年「示威行動」に関する正確な理解が必要なのである。

また、この事件はマレーシア連邦形成に際する、英領サラワクの左派ゲリラの活動を背景にしており、その残存勢力を右派のスハルト政権が駆逐し、西カリマンタンに対するインドネシア国軍の圧倒的な支配力を確立するための過程であった。この事件によって、それまでの現地の秩序が崩され、インドネシア国軍による監視と支配がこの地域に適用されるというプロセスを経て、西カリマンタンはインドネシア国家の内部により深く組み込まれることになったのである。

最後に「示威行動」がもたらした、ダヤク人社会の衰退と難民化による華人の影響力の減退について、今後の研究の展望を述べる。「示威行動」以前においては、ダヤク人と華人の間に紛争はなく、両者の政治的影響力は強かった。ところが「示威行動」によってどちらとも壊滅させられ、スハルト体制期においては、ムラユ人、ジャワ人の主に軍人による政治支配が開始され、華人とダヤク人はますます周縁化されていく。この結果を鑑みると、インドネシア国軍が当初から、ダヤク人に華人を追放させ両者が「共倒れ」になることを画策していた可能性も否定できない。しかしこの問題は、実際にそれを根拠づける国軍関係の資料の発掘を待つて再度議論されるべきものであろう。

〔付記〕 本稿は、東京大学大学院総合文化研究科提出の博士論文の一部に加筆修正を行ったものである。

注

- (1) 中国籍の場合は華僑，インドネシア国籍など現地国籍の場合は華人というように国籍によって区別することもあるが，本論文においては中国に祖先のルーツがある人々一般を指す言葉として「華人」の語を用いる。
- (2) 「紅頭事件」という名称は，華人を追放したダヤク人が頭に巻いていた赤い鉢巻に由来する。詳しくは後述する。
- (3) ポンティアナックは西カリマンタン州の州都で人口約70万人，シンカワンは，ポンティアナックの北100キロメートルの地点にある西カリマンタン州第2の都市で人口約20万人である。
- (4) マラヤ連邦のアブドゥル・ラーマン首相（Tunku Abdul Rahman）が提唱した当初の構想は，マレー半島部，シンガポール，サラワク，サバ，ブルネイを含めて独立政体を作るというものであった。
- (5) ソフィアンはアラブ系マドゥーラ人であるが，西カリマンタンのインドネシア共産党組織には華人も多く関わっていた [Davidson and Kammen 2002: 59]。
- (6) 客家系華人の出身地は主に，中国華南の福建省・広東省の山岳地帯（梅州，惠州など）であるが，その一部は中国内陸の四川省等にも居住する。彼らは多様な方言に分かれる客家語を話す。客家系華人の東南アジアへの移民は，西カリマンタンの金鉱床採掘，マレー半島や蘭領東インドのバンカ島（Bangka），プリトゥン島（Belitung）における錫鉱床採掘の分野に多い。
- (7) 潮州系華人は，中国広東省の潮州，汕頭を主な出身地とする民族集団であり，福建省南部で話される閩南語に近い潮州語を話す人々である。
- (8) 2010年のインドネシア国勢調査によると，西カリマンタン州の全人口は4,393,239人である。また人口構成比は，ダヤク人30%，ムラユ人30%，華人15%であり，特に華人は西沿岸部の都市部に集住する [Somers Heidhues 2003: 259]。
- (9) この組織名は Dayak ではなく，Daya が正式な綴りである。
- (10) 曾松輝へのインタビュー，ポンティアナック市郊外のシャンタン郡，2012年6月24日。
- (11) 黄国謀へのインタビュー，シャンタン郡，2012年6月24日。
- (12) アブイへのインタビュー，ポンティアナック，2012年6月26日。
- (13) S教授へのインタビュー，ポンティアナック，2014年6月21日。
- (14) オルバヌス・オクーへのインタビュー，スバドゥ，2014年6月25日。
- (15) ドゥーラ神父へのインタビュー，ジャカルタ，2011年3月8日，2012年1月3日。彼は，東インドネシアのフローレス島に生まれ，1966年から1971年までの間タンジュンブラ第12軍管区の専属神父として華人追放事件に接した。彼自身も殺害された首長の埋葬の儀礼を，軍専属の神父として2人ずつ6回にわたって執行したことがあるという。
- (16) 『アンカタン・ブルスンジャタ（*Angkatan Bersenjata*）』1967年9月21日。
- (17) トマス・ムラドへのインタビュー，サマランタン，2010年11月19日。
- (18) ドゥーラ神父へのインタビュー，ジャカルタ，2012年1月3日。マニユケ人はダリット

を故地とするダヤク人の一種族であり、ポンティアナックのダヤク研究所 (Institut Dayakologi) の行った調査によると、マニユケ語の話者は1998年当時で1,468人であったという [Bamba 2008]。

- (19) サマランタンのダヤク人村民へのインタビュー, 2010年11月19日。
- (20) トマス・ムラドへのインタビュー, サマランタン, 2010年11月19日。
- (21) パンスマ軍の名は、日本軍政期にサンガウで日本軍と戦ったダヤク人指導者から取られている [Davidson 2008: 70]。
- (22) ドウーラ神父へのインタビュー, ジャカルタ, 2011年3月8日。
- (23) ドウーラ神父へのインタビュー, ジャカルタ, 2011年3月8日。
- (24) ポンティアナック出身で、ソフィアンらのインドネシア共産党勢力に関わり西カリマンタンの武力闘争に参加した人物である。
- (25) 本章に登場するマルガラータ, F. D., オルバヌス・オクーの各人物は、タンジュンブラ大学のS教授とともに内陸部に調査に赴いた際に出会ったインフォーマントであり、S教授立ち合いのもとでインタビューを行った。著者は「示威行動」を実際に目撃した人あるいは自身が参加した人に会いたいと事前にS教授に話し、それにふさわしいインフォーマントを選定してもらった。
- (26) 「身の危険」についてどこから情報を得たのか、と筆者が尋ねたところ、口から口へ噂が広がっていたという回答のみが得られた。ジャワでは、インドネシア国軍の特殊部隊 (RPKAD など) による巧みな情報操作が行われており、西カリマンタンにおいても同様の軍による情報操作が行われていたことは十分ありうる。
- (27) マルガラータへのインタビュー, スバドゥ, 2014年6月25日。
- (28) F. D. へのインタビュー, パフマン, 2014年6月25日。
- (29) この山の名称は、デイヴィッドソンとカンメンの論文においては Mt. Merebuk と表記されている [Davidson and Kammen 2002: 65]。
- (30) 「赤い腕」について F. D. は次のように説明した。「赤い腕」が回ってきた場合には、ダヤク人は危機が迫っている状態を自分で解消しなくてはならない。そのためにすぐ出発しなければならず、状態が安定するまで家に帰ることはできない (F. D. へのインタビュー, パフマン, 2014年6月25日)。
- (31) 彼だけではなく、サマランタンのダヤク首長トマス・ムラドも「示威行動」の最中にはとても速く歩くことができたことを強調した。トマス・ムラドへのインタビュー, 2010年11月19日。
- (32) 赤い鉢巻をつけるほか、リニユアック (rinyuak) と呼ばれる赤い葉を頭に着けていた。マルガラータへのインタビュー, スバドゥ, 2014年6月25日。
- (33) これを彼はシカット (sikat) したと表現した。sikat は一般には「(ブラシなどで) 払い落とす」という意味である。
- (34) 彼自身の経験であるのか、知り合いから聞いた話なのか判別がつかなかったが、ムラプカトンで共産主義ゲリラ関係者を捕まえてインドネシア国軍に渡したことがあった

という。その中には華人の女性もいた。F. D. へのインタビュー，パフマン，2014年6月25日。

- (35) ドウーラ神父へのインタビュー，ジャカルタ，2012年1月3日。
- (36) アプイへのインタビュー，ポンティアナック，2012年6月26日。
- (37) 筆者は2014年6月にアンジュンガンの町を観察する機会があったが，ンガバンの町を観察する機会をまだ持っていないために，これを実際に比較できない。
- (38) ドウーラ神父へのインタビュー，ジャカルタ，2011年3月8日。
- (39) 『アクサヤ (Akcaya)』1982年4月6日など多数。『アクサヤ』紙はポンティアナックで1974年から発行されている日刊紙で，2000年代に『ポンティアナックポスト (Pontianak Post)』と名前を変えて現在まで発行が続いている。

参考文献

日本語

- 倉沢愛子. 2014. 『9・30 世界を震撼させた日：インドネシア政変の真相と波紋』岩波書店。
戴國輝・井草邦雄. 1974. 「9・30事件前後のインドネシア華人・華僑事情」戴國輝編『東南アジア華人社会の研究・下』159-180. アジア経済研究所。
原不二夫. 2009. 『未完に終わった国際協力：マラヤ共産党と兄弟党』風響社。

英語

- Coppel, Charles. 1983. *Indonesian Chinese in Crisis*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
Davidson, J. S. and Douglas Kammen. 2002. "Indonesia's Unknown War and the Lineages of Violence in West Kalimantan." *Indonesia* 73: 53-87.
Davidson, J. S. 2008. *From Rebellion to Riots: Collective Violence on Indonesian Borneo*. Madison: University of Wisconsin Press.
Feith, Herbert. 1968. "Dayak Legacy." *Far Eastern Economic Review*, January 25, 134-135.
Hui, Yew-Foong. 2011. *Stranger at Home: History and Subjectivity among the Chinese Communities of West Kalimantan, Indonesia*. Leiden: Brill.
Jenkins, David. 1978. "The Last Headhunt." *Far Eastern Economic Review*, June 30, 25.
Mackie, J. A. C. 1976. "Anti-Chinese Outbreaks in Indonesia, 1959-68." In *The Chinese in Indonesia: Five Essays*, edited by J. A. C. Mackie, 77-138. Honolulu: University of Hawaii.
Porrit, Vernon L. 2004. *The Rise and Fall of Communism in Sarawak 1940-1990*. Clayton: Monash Asia Institute.
Somers Heidhues, Mary. 2003. *Goldiggers, Farmers, and Traders in the "Chinese Districts" of West Kalimantan, Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
———. 2005. "The Makam Juang Mandor Monument: Remembering and Distorting the History of the Chinese of West Kalimantan." In *Chinese Indonesians: Remembering, Distorting, Forgetting*, edited by Tim Lindsey and Helen Pausacker, 106-129. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
Tanasaldy, Taufiq. 2012. *Regime Change and Ethnic Politics in Indonesia: Dayak Politics of West Kalimantan*. Leiden: KITLV Press.

Yuan, Bingling. 2000. *Chinese Democracies: A Study of the Kongsis of West Borneo, 1776-1884*.
Leiden: Research School of Asian, African, and Amerindian Studies, Universiteit Leiden.

インドネシア語

Bamba, John. 2008. *Mozaik Dayak: Keberagaman Subsuku dan Bahasa Dayak di Kalimantan Barat*. Pontianak: Institut Dayakologi. (ダヤクのモザイク模様：西カリマンタンのダヤクのサブエスニックグループと言語の多様性)

回顧録

Doera, Isak. 2003. *Memori Pelaksanaan Tugas sebagai Pastor Militer*. Jakarta: Yansol Mentari.
(従軍神父としての職務遂行の記憶)

Hulten, Herman Josef van. 1992. *Hidupku di antara Suku Daya: Catatan seorang Misionalis*.
Jakarta: PT Gramedia Indonesia. (ダヤク人の中の私の生活：ある宣教師の備忘録)

林世芳. 2010. 『西加風雲』Bintulu, Sarawak: 砂隆印務有限公司 (Sadong Press Sdn. Bhd.).

新聞

Angkatan Bersenjata, 1967年9月21日, ジャカルタ

Akcaya, ポンティアナック

Dayak Politics in Anti-Chinese Demonstration of 1967, West Kalimantan, Indonesia

MATSUMURA Toshio

KEYWORDS

West Kalimantan, Chinese, Dayak Demonstration,
Red Bowl (*mangkok merah*), Oevaang Oeray

ABSTRACT

This paper analyzes the process and outcome of the anti-Chinese Dayak Demonstration (Demonstrasi Dayak) of 1967 in West Kalimantan, taking into account Dayak politics and their social circumstances.

Since the early 1960s, the Chinese communist guerillas from Sarawak who resisted the formation of the Federation of Malaysia had been also active in West Kalimantan. President Sukarno supported them in the context of his confrontation policy against Malaysia. However, after the September 30th Incident of 1965, Suharto's

anti-communist army intended to destroy them by pushing all the Chinese communities from the hinterland into larger cities near the coast. The army provoked the indigenous Dayak people to carry out these violent evictions.

Chinese in West Kalimantan had lived harmoniously with Dayak people from the middle of the 18th century, but in their daily lives, Dayak people were aware of the economic inequality between themselves and the Chinese, and were often frustrated by this inequality biased against them. Moreover, a competition between two Dayak leaders, Oevaang Oeray and Palaoensoeka in the 1960s, saw Oeray lose influence on Dayak society after the 1965 Incident, since he had led the leftist party, Partindo. However, he still harbored a desire to regain political power and establish territories where Dayak people had privileges over Chinese. Thus, he cooperated with the Indonesian army in the Dayak Demonstration.

At first, the provocation of the Indonesian army brought no reaction from Dayaks. But, in October 1967, Oeray issued a “declaration of war” against the Chinese. The red bowl (*mangkok merah*), a signal of preparing for war, was circulated in the Dayak villages. Dayaks subsequently started to drive the Chinese away, quickly and drastically.

After this incident, however, in the absence of Chinese traders, the economic conditions declined in the hinterland, and Dayaks themselves suffered from the lack of food and other basic necessities.

In the national context, this incident marked the completion of the establishment of Indonesian state authority through military occupation in West Kalimantan, which earlier had enjoyed independent order.

Finally, this paper emphasizes the continuity of violence in the Dayak society. After the expulsion of the Chinese, the same pattern of protests had been on the rise against the Madurese, until the culmination of the Dayak-Madurese conflict in the latter half of the 1990s.

(連絡先 : toshio_m_2@hotmail.com)